

若者の内向き志向は社会的課題

海外留学数が減少してきて、最近の日本の若者は内向き志向だと言われます。はたしてそれは子どもたちの問題なのでしょうか。むしろ社会的な課題なのではないかと感じています。

自由の森学園高校3年生の小倉加奈さんの例を紹介しましょう。高校1年生の初めにたまたまのぞいた講座が、後の進路選択のきっかけになりました。

それは韓国の高校生と交流しながら歴史や文化を学ぶ韓国講座。夏休みに韓国を訪問し、冬休みには韓国の高校生を迎え入れる相互訪問を行うものです。1年生夏の韓国研修旅行は「衝撃だった」と言います。それまでガールスカウトのワールドキャンプに参加したこともあって、外国人には比較的慣れていた彼女でも、韓国でのホームステイ体験は驚きの

世界との出会い

まなぶ

連続でした。

韓国人は顔も日本人と似ているし、すぐ隣の国なのに、全く違う国だということを感じたと言います。自分も受け入れてくれた家族も言葉が通じないけれども、互いに一生懸命伝えようとして、それが本心に楽しかった。「韓国語ができるようになりたい」。そこから彼女は韓国語を学び始めます。

1年生の春休みは1カ月、韓国に短期留学。東日本大震災のニュースは韓国で知りました。ホームステイさせてもらった韓国の友人に連れていってもらった日曜日には初めての体験でした。そこから彼女は宗教について関心を抱きます。高校2年では、世界史の選択講座でイスラム教とキリスト教について学びました。高校3年の社会科のリポートは、日

本人の宗教観について調べ、まとめました。

韓国と日本とは、宗教に対する感じ方がだいぶ違う。日本人は宗教ということ敬遠する人もいるけれど、韓国では自然に受け入れられている、と。

卒業後は国際文化を大学で学ぶことになっていきます。韓国を入りに東京に焦点を当てて学んできた高校生活。「自分はまだ吸収する時期」。大学ではどう興味が広がっていくか見当もつかないそうです。

大学受験を意識して早い段階から準備することが大切だとよく言われます。でも生徒たちの問題意識の形成がそのスピードについていくことはまれでしょう。私は、背中を押すキャリア教育よりも、生徒個々の熟し方を見極めながらサポートする術づが求められているように思います。

(自由の森学園高校校長 鬼沢真之)